将棋の駒『富士駒』各地で人気を集め

関東各地の新春「ふれあい将棋フェア」に出演

藤井聡太棋士の人気で将棋への関心が高まり、藤井棋士との対局で話題を呼び特異なキャラクターでテレビ出演も重ねて『ひふみん』の愛称で人気アイドル化した加藤一二三九段の活躍もあって、昨年から一気に高まった将棋人気を反映してデパートや大型商業施設での「将棋まつり」などのイベントには小学生や女性ファンが増えるなど加熱し、小学生の将棋大会は全国各地で定員の数倍の申し込みがあるほどの人気となっている。

8日に富士市のロゼシアターでスペシャルゲストに中尾敏之五段を迎えて開かれた「ロゼ富士山こども将棋大会」も例年に倍する子ども将棋愛好家が参加して催された。ロゼでのこども将棋大会には、「名人戦記念品・富士駒」の作品展示が行なわれ話題を集めた。

大澤さんが『富士駒』のメンバーと共に、加藤一二三九段や女流棋士らと新春「ふれあい将棋フェア」に出演

『富士駒』は、富士宮市富士見ヶ丘の大澤建夫さんが独学で始めた駒づくりを歴史の始まりに、指導を受けた愛好家でつくる「富士駒・駒づくりの会」を通じて駒づくり愛好者を増やす普及指導で人材発掘の苦労を重ね、将棋の駒の聖地『天童』（山形県天童市）に負けない「東海の天童」を目指した「地場産業としての富士駒づくり」を進め、製作した駒が将棋専門店に並ぶ「駒師」を数多く輩出、『富士駒』が将棋の駒製作の一大勢力として注目を集め、タイトル戦で大澤さんの『富士駒』が使われるなどもして「富月」の雅号で知られる大澤さんは『次代を担う「駒師」』として日本将棋連盟発行の「将棋世界」に紹介され、将棋連盟のカレンダーを『富士駒』が飾るなどして注目を集めている。

『富士駒』の創始者で製作・指導者の大澤さんは、千葉県千葉市や栃木県宇都宮市など4都市で1日から7日まで開かれた新春「ふれあい将棋フェア」に出演、『ひふみん』こと加藤一二三九段や女流棋士らとの対談などで、ラジオの公開番組・ふれあい将棋大会・指導対局・サイン会・記念撮影会のイベントが催されたフェアに出演してインタビューなども受け、『ひふみん』や女流3段2段の棋士たちと親交を深め、大澤さんと参加した「富士駒・駒づくりの会」のメンバーもイベントで『富士駒』のPRを行い、各会場で『富士駒』は話題を集めた。

「富士宮の特色ある商品にしたい」『マスマヨバーガー』の製作実習

富士宮高校会議所が久保田とも子さんの指導で

久保田さんの指導でニジマス活用食品作り

富士宮高校会議所（中村真緒会頭）は12日、富岳館高校食品加工室で、和菓子処三代目の久保田とも子さんの指導で、久保田さんと高校会議所がニジマス活用食品作りのコラボで開発した、富士宮市が日本一の生産量を誇るニジマスを主素材にした『マスマヨバーガー』の製作実習を行い、『マスマヨバーガー』の普及に意欲を新たにした。

高校会議所のスタッフは、久保田さんの手ほどきを受けながら『マスマヨバーガー』を仕上げ、「美味しそう。これを富士宮の特色ある商品にしたい」と笑顔を重ねていた。

「干支貼り絵」施設利用のお年寄りが制作

ディサービスセンター「わかみや」

話題のひろば

富士宮市小泉のディサービスセンター「わかみや」（管理者・鈴木歩惟さん）の正面玄関フロアに施設利用のお年寄りが制作した干支貼り絵が飾られ、話題を広げている。

戌年にちなんで「犬」を描き出した貼り絵は、深澤モリ江さん（83）井出八重子さん（94）ら10人の利用者が2ヶ月ほどで仕上げたもので、下絵には施設利用の人たちの顔写真を一杯に貼り、その上に京花を縮小して福ダルマを犬の形にデザインした貼り絵を中央に貼って仕上げた。

施設を訪れた人たちには、ドアを開けると先ず最初に飛ぶこんでくる大判サイズの犬の貼り絵が、初春の雰囲気を広げて人気を集めている。

同所では、毎年、職員の若月弘子さんらの協力で、10月になると、干支作品づくりの準備をスタートし、作品を仕上げてきた。完成した作品を写真で撮って、年始の挨拶に利用もするなどしてきた。施設内の壁には、利用者の手づくり作品や、昨年の干支貼り絵「酉」にちなんだ鳥の貼り絵作品も飾っている。

施設利用のお年寄りが制作した「犬」の干支貼り絵

「腐蝕の深層」

第2章 背景の連鎖

不信感と疑惑深める新事実の浮上も

役所の開発・許認可対応に疑惑深める3つの渦

富士宮市の開発許認可を受けて沼久保地先に建設されたメガソーラー基地で、許認可の手続きに関連して開発業者の「見せ金工作」に政治家の介在を明らかにする事実解明の捜査を求めた刑事告発が行われていた事案では、告発前に告発された議員本人や関係者や関係機関等多数に事実確認の公開質問が行なわれていたことが明らかになった。

市役所の開発許認可手続きや事業執行で閉店店舗の高額買い上げ（1億超の事業費）問題では、住民監査請求が行われていた問題の他に行政のこの事案に関する事前からの動きで問題を深める対応があったことが浮上してきた。

富士開拓農協が富士宮市と環境省の指定を受けて建設を進めているバイオマスプラント事業に関わる事案では、「環境保護指定地域に環境省のモデル事業の特例でプラントを作り、3年後解体の約束を破棄して、もし民間業者に売却されることがあれば、環境破壊にもつながりかねない産廃施設が朝霧に増設されることになる。業者には環境破壊規制をすり抜けて施設を手に入れる美味しい話にもなるが、すでに買取先も決まっているのではないか、などと言った不穏な話も聞く」と言った市民の疑問を裏付けるような、3年後解体を破棄して「民間売却で継続」を示唆するとも思われる須藤市長の「3年後が気になる、次の手で対応を望む」発言が公式会合のシンポジウムで出たことから、一気に不信感を深める事態となっている。

バイオマスと大型トリ小屋開発など開拓農協関連問題には前市長と周辺者の事業関与が指摘され、バイオマスプラントでは事業認定までの経緯や背景に関しても新たな疑問が提起されてきている。

このように、市政上の開発・許認可に関わる案件では、3つの大きな「ブラックホール化」した疑惑の渦が、新たな疑惑を裏付ける資料や事実が明らかになり、背景には同じような人物と周辺者が重なって関わりを持っている『利権漁り』の「複層」した『相関図』が描かれてきている。

このほど明らかにされた「市政モニターアンケート『市議会』」でも、モニターの市民から、行政や議会に市民の声が反映されていない理由に「都市計画に長期的視点が感じられない」と共に、

『市民を悪者呼ばわり』

第1の渦「大社鳥居西側閉店店舗の高額（1億超の事業費）買い上げ問題では、住民監査請求が行なわれていたことや事業変更でミニ公園整備が現実のものになるにしたがって商店街の市民などからも市役所の事業執行に疑問を募らせる声が深まってもきている。

閉店店舗の売却問題では、市が買い取りを提示する前に民間と民間で交渉の打ち合わせがあったところに市役所が周辺関係者の介入で入り込み、土地購入の予算措置に解体費や移転補償費まで上乗せして1億円超の高額事業費（公園整備なども含めるとさらに増額）になっていった背景が明らかにされ、さらに市が買い上げを行ったことに、市長らが市議会議員らに市の買い上げ理由を説明するのに、「悪い人間が入り込んでいるから市が買い上げる」などと市民を悪者呼ばわりして正当性を主張したことを議員から聞いたとする市民の話もあり、民間と民間の交渉打ち合わせでは、悪者呼ばわりされた市民が「委任状」まで受けて委任され交渉に当たろうとしていたのに、幹部職員らが市の買い上げ交渉に当たった人物の委任状を取り上げるように工作したとされる事実も明らかにされようとしている。

『特別調査に値する』

閉店店舗の問題では、発端で市役所幹部への「橋渡し」に恩着せがましく飛び込み動き回った市民らの介在事実がさらに明らかにされれば、市幹部ら役所が「民民」の土地交渉に入り込んで、「市民を悪者呼ばわり」して役所の交渉を正当化するなど複雑化した問題と不可解な周辺関係者関与の「利権漁り」の背景を明らかにするための『特別調査』に値する疑惑」との声も上がっている。

閉店店舗の高額（1億超の事業費）買い上げ問題は、住民監査請求が行なわれていたことでさらに波紋を広げている。